中間時代　　第一部　神の歴史計画から見る中間時代　【復習】

□「中間時代」に関する学び全体のアウトライン

第一部　神の歴史計画から見る中間時代
　第一章　　中間時代とは
　第二章　　神の歴史計画
第二部　反キリストの予表
　第一章　　反キリストの予表に関する預言
　第二章　　歴史的成就＝アンティオコス4世・エピファネス
　第三章　　宮きよめの祭り（ハヌカ）
第三部　宮きよめの祭りでのメシアの教え
　第一章　　イエスの神性宣言と光の奇跡との関係（ヨハネ10：22～39）
　第二章　　「光の中を歩む」（Ⅰヨハネ1：5～9）

□はじめに

昨年9月から11月の3回にわたり、第一部「神の歴史計画から見る中間時代」を扱いました。

1. 中間時代とは、旧約聖書の最後の預言者マラキから新約聖書の福音書の時代に入るまでの約430年間を指します。
2. この時代に何が起きるかについては、バビロニヤの王とメディヤ・ペルシヤの初期の王に仕えた預言者ダニエルが、四つの国に関する預言をしていました。

	一つの像（2章）	四頭の獣（7章）	雄羊と雄やぎ（8章）
第一の国	頭（金）＝バビロニヤ	獅子、鷲の翼	
第二の国	胸と両腕（銀）	熊	雄羊＝メディヤ・ペルシヤ
第三の国	腹ともも（青銅）	ひょう	雄やぎ＝ギリシヤ
第四の国	すね（鉄）と足（鉄・粘土）	第四の獣	

(1) 旧約聖書の最後の預言者マラキは、第二の国「メディヤ・ペルシヤ」の時代。
(2) 新約聖書の福音書が記すメシアの公生涯3年半は、第四の国の時代。
(3) マラキからメシアの登場までを「中間時代」という。
(4) よって、中間時代は、
　① エルサレムを取り巻く世界の支配者が、メディヤ・ペルシヤ→ギリシヤ→第四の国と、大きく変動していく時期である。
　② イスラエルの民の視点からは、マラキまででエルサレムの再建を終え、メシアの到来を待つという時期である。

3. 本日は、第一部の復習をかねて、エズラ記とネヘミヤ記を時系列で把握し、預言者ハガイとゼカリヤ、そしてマラキとの対応を再確認します。

□エルサレム再建の道のり、メシア到来への備え

1. メディヤ・ペルシヤがバビロニヤを倒した。イスラエルの民はバビロン捕囚から解放されて、ユダの地に帰還（ダニ5：30～6章、エズラ1章～6章）

(1) ダニ5：30～31　紀元前539年、メディヤとペルシヤの連合軍が、バビロニヤの首都バビロンを制圧
　① メディヤの王はダリヨス、ペルシヤの王はクロス。実権はペルシヤが掌握。
　② ペルシヤの居城はスサ（シュシャン）であったが、メディヤ・ペルシヤは、首都をそのままバビロンとした。
　③ その初代の王には、メディヤ人ダリヨスが就任（ダニ5：30～31）。実権はクロスが握っており、ダリヨスが内政を担当し、クロスは諸民族の平定のため軍を指揮して遠征していたと思われる。
　④ ダニエル書6章は、ユダヤ人のダニエルがダリヨス王に重用されたときの事件を記している。

(2) エズラ1：1～4　紀元前538年、メディヤ・ペルシヤの第2代の王、クロスの勅令
　① イスラエルの民をバビロン捕囚から解放し、故郷に帰ることを許した
　② 帰還する民には、エルサレムに神殿を再建することを命じた

(3) エズラ1：5～11　帰還の準備
　① リーダーは、「ユダの君主シェシュバツァル」（1：8）＝2：2「ゼルバベル」
　② 「ユダの君主」といっても、ユダ王国再興を認められたわけではない。ゼルバベルが王の家系であったことを示す。→　マタイ1：12「ゾロバベル」

(4) エズラ2章　帰還民第1陣の陣容
　① リーダーはゼルバベル（2：2）
　② 大祭司は、ヨシュア（2：2、36）
　③ 彼らは、ユダの地に入り、部族ごとにかつての自分たちの町々に住んだ（2：70）

(5) エズラ3章　神殿再建工事の開始
　① 3：1～7　彼らは、第7の月にエルサレム跡地に集まり、モーセの律法に従って仮庵の祭りを祝った（紀元前537年）
　② 3：8～13　その翌年の第二の月（紀元前536年）から神殿再建工事に着工

(6) エズラ4章　周辺異民族の反対
　① 4：1～5　「その地の民」の反対により工事は止まり、「クロス王の時代から、ペルシヤの王ダリヨスの治世の時まで」（5節）中断した。
　② 4：6～23　後の時代に関する挿入記事（詳しくは、後述）
　③ 4：24　5節から続く　神殿再建工事はダリヨスの治世第2年まで止まった

(7) エズラ5章　工事再開（紀元前520年）
　① 5：1～2　預言者ハガイとゼカリヤの預言を受けて、工事再開。

② 5：3～17　川向うの総督からダリヨスⅠ世への報告

- ゼルバベルの公的な地位は「ユダヤ人の総督」（5：14、6：7）。ただし、ユダの地があった州は、メディヤ・ペルシヤの呼称では「川向こうの地」であり、州全体の統治責任者として「川向うの総督」（5：3）がいた。

(8) エズラ6章　ダリヨス王の命令

① 第2代の王クロスによる勅令があったことを確認し、再建費用の国費支出を命じた。

② 15節　第4代の王ダリヨスの治世第6年（紀元前516・515年）、神殿は完成した。

- 14節「ペルシヤの王アルタシャスタの命令によってこれを建て終えた」は、後の時代にエルサレムの城壁と門を修復したことを指す。挿入記事である。（後述の5.）

2. 神殿再建工事をしていた時期に、ハガイとゼカリヤはどのような預言をしたのか

(1) ハガイの預言　ハガイ2：20～23（10節「ダリヨス王の第2年」＝紀元前520年）

① 神は天と地を揺り動かす

② もろもろの王国の王座をくつがえす

③ 異邦の民の王国の力を滅ぼし、戦車とそれに乗る者をくつがえす。馬と騎兵は彼ら仲間同士の剣によって倒れる

④ その日、ゼルバベルは、神に選ばれて、「わたしはあなたを印形のようにする」

(2) ゼカリヤの預言　ゼカ14：1～21（7：1「ダリヨス王の第4年」＝紀元前518年）

① 主の日（1～5、12～15）

② メシアの王国（6～11、16～21）

3. エズラ記1章～6章は、神殿再建工事に関する記事であるが、その中で、4：6～23の部分は、後の時代には町の再建に対して周辺異民族から反対があったという挿入記事

(1) 4：6　「アハシュエロス」は第5代の王（在位は、紀元前486～465年）

- ユダヤ人のエステルを王妃とした王（エス1：1、2：16～17）

(2) 4：7～23　「アルタシャスタ」は第6代の王（在位は、紀元前465～424年）

(3) 神殿再建の次は、エルサレムの町の本格的な再建（城壁の修復を伴う）が必要。しかし、周辺異民族は町の再建について、2回にわたり反対し、建設工事を進めることができなかった。・・・フルクテンバウム博士の「The Historical and Geographical Maps of Israel」118頁によると、この2回とも時期としては、ペルシヤの支配に対してエジプトが反乱を起こした時期と重なる。エルサレムが要塞化すると、ユダヤ人がエジプトの側につく恐れありと警戒されたのであろう。

(4) 第6代の王は反対派の意見を採用して、城壁の修復を一時中止させた（4：21）。

① 4：12　「あなたのところから、こちらに来たユダヤ人たち」

② 7章　アルタシャスタ王は、その治世第7年にエズラを派遣した。

4. エズラ記7章～10章　第6代の王アルタシャスタ治世下でのエズラの活動
   (1) エズラは、祭司であり学者（エズラ7：6、21、26～28）。
   (2) エズラは、王の命令を受けて、王の治世第7年（紀元前459年）に、バビロンを出発し、エルサレムに着いた。・・【第2神殿完成から57年経過】
      ① 帰還したユダヤ人たちに律法を教え、神殿祭儀を律法にのっとって行うためであった（エズラ7章）
      ② 王の目的は、神の宮の祭儀を滞りなく行わせ、帝国の安寧を祈らせるため。「天の神の御怒りが王とその子たちの国に下るといけないから」（7：23）
      ③ 川向うの役人たちへの王の命令（7：21～24）
      ④ エズラの最初の取り組みは、周辺異民族との同化をやめること（エズラ9～10章）
   (3) このとき、エズラの教えによって励まされたユダヤ人たちが、エルサレムの城壁修復工事をしようとして、周辺異民族の反対を招き、王による工事中止命令となった（4：7～23）
   (4) この王の中止命令が撤回され、城壁修復が許されるのは、これから13年後、王の治世第20年（紀元前445年）のことであった。それが、ネヘミヤ記に記される。

5. ネヘミヤ記　　ネヘミヤがユダの総督となって城壁を再建した
   (1) 1章～2章　ネヘミヤが総督となる経緯
      ① 1：1～3　エルサレムの現状「城壁はくずされ、門は火で焼き払われたまま」、紀元前586年バビロニヤによってエルサレムが破壊されたときからのまま、ということ。
      ② 1：4～11　ネヘミヤの祈り
      ③ 1：11　そのとき、彼は王の献酌官であった。献酌官とは、王の側近の高官
      ④ 2：1～8　王の治世第20年（紀元前445年頃）、ネヘミヤは王に願い出て、エルサレム城壁修復の許可を受け、ユダの総督として現地に赴任した。
      ⑤ ユダの総督としての地位は12年間であるが（5：14）、12年間通してユダに滞在したわけではなかったようである（2：6、5：16、6：15、13：6）。フルクテンバウム博士の論稿「マラキ書」5ページでは、ネヘミヤが城壁を再建するためにエルサレムに滞在した時期を、紀元前444～443年としている。
         - 2：6　王は、ネヘミヤが長期赴任することは望んでいなかった
         - 5：16　ネヘミヤは工事に専念し、ユダの地に農地を買わなかった
         - 6：15　城壁は、52日間で完成した
         - 13：6　エルサレムにいない時期があった
   (2) 3章～6章　城壁の再建
      ① 3章　門と城壁の修復工事について、場所ごとに分担を定めて進めた
      ② 4章　外側からの問題：周辺異民族の妨害　→　武装して工事を進めた

③　5章　内側の問題：工事に従事する民の負担　→　負債の帳消し、担保に取っていた畑や家の返還、取り立てていた利子の払い戻し

④　6章　ネヘミヤ個人に対する圧迫

- 6：15　これらの問題や圧迫を乗り越えて、52日間で城壁は再建された

(3)　7章　門衛や神殿に仕える人々などの任命

(4)　8章　第7月に仮庵の祭りを祝った。このとき、祭司で学者のエズラも協力。

(5)　9～10章　盟約（9：38）　その内容は10：30～39

(6)　11章　エルサレムに定住する者を決める

(7)　12章　祭司とレビ人の名簿、12：27～13：3　城壁の奉献式

(8)　13：4～31　盟約から約10年後、祭司たちも民も不信仰の問題に陥っていた

①　13：6～7　王の治世第32年（紀元前433年）、ネヘミヤはバビロンに行った（＝総督の任務終了）。その後しばらくたって、王にいとまを請い、エルサレムに帰ってきた。

②　13：4～31　三つの問題とそれに対する取り組み

- 祭司たちの不信仰→祭司がその責務に違反する（13：4～9、マラキ1：6～2：9）
- 民の不信仰①→民が十分の一を捧げることを怠り、祭司やレビ人が逃げ出す（13：10～13、マラキ3：8～12）
- 民の不信仰②→ユダヤ人男性が周辺異民族の女性と不法な結婚をして、偶像崇拝に染まっていく（13：23～28、マラキ2：11～16）

③　預言者マラキは、この時期のネヘミヤの活動に呼応して活動したものと推測される。

- この点、9月における説明「エズラとネヘミヤの活動期間（紀元前458～433年）と同時期とみられる」を訂正します。紀元前433年からあと、ネヘミヤが退官してエルサレムに帰還した時期、紀元前432～430年の頃かと推測されます。よって、中間時代は約430年くらいです。

6.　マラキは、何を預言したか

(1)　3：1　メシアの前に、先駆者が来る　→　バプテスマのヨハネ

①　メシアは、突然、神殿に来る　→　ヨハネ2：13～21

②　メシアは、イスラエルが待ち望んでいる契約の使者である

- エレミヤの新しい契約（エレ31：31～34）
- マタイ26：28「これは、わたしの契約・・・」

(2)　3：2～5　メシアが来る日は、神のさばきの日である・・・メシア再臨のとき

(3)　4：5～6　神のさばきの日は、「主の大いなる恐ろしい日」

①　ゼカリヤ14：1では「主の日」

②　その時期が来る前に、主は預言者エリヤをイスラエルに遣わす

7. イエスが生まれたのは、紀元前7～6年頃（ヘロデ大王の死去は紀元前4年）。この当時、人々が実際に待ち望んでいたのは・・・ハガイ、ゼカリヤ、マラキの預言の成就
   (1) メシアが生まれる　→　ルカ2：8～11、25～32、マタ2：4～6
   (2) 預言者エリヤが来る　→　ヨハネ1：21、マタ17：10～12
   (3) メシアが現れる　→　ヨハ1：19～20、45～46
   (4) 主の日が来る　→　マタ3：7「必ず来る御怒り」
   (5) メシアの王国が立つ　→　マタ3：2、6：10、20：20～23、使1：6～7

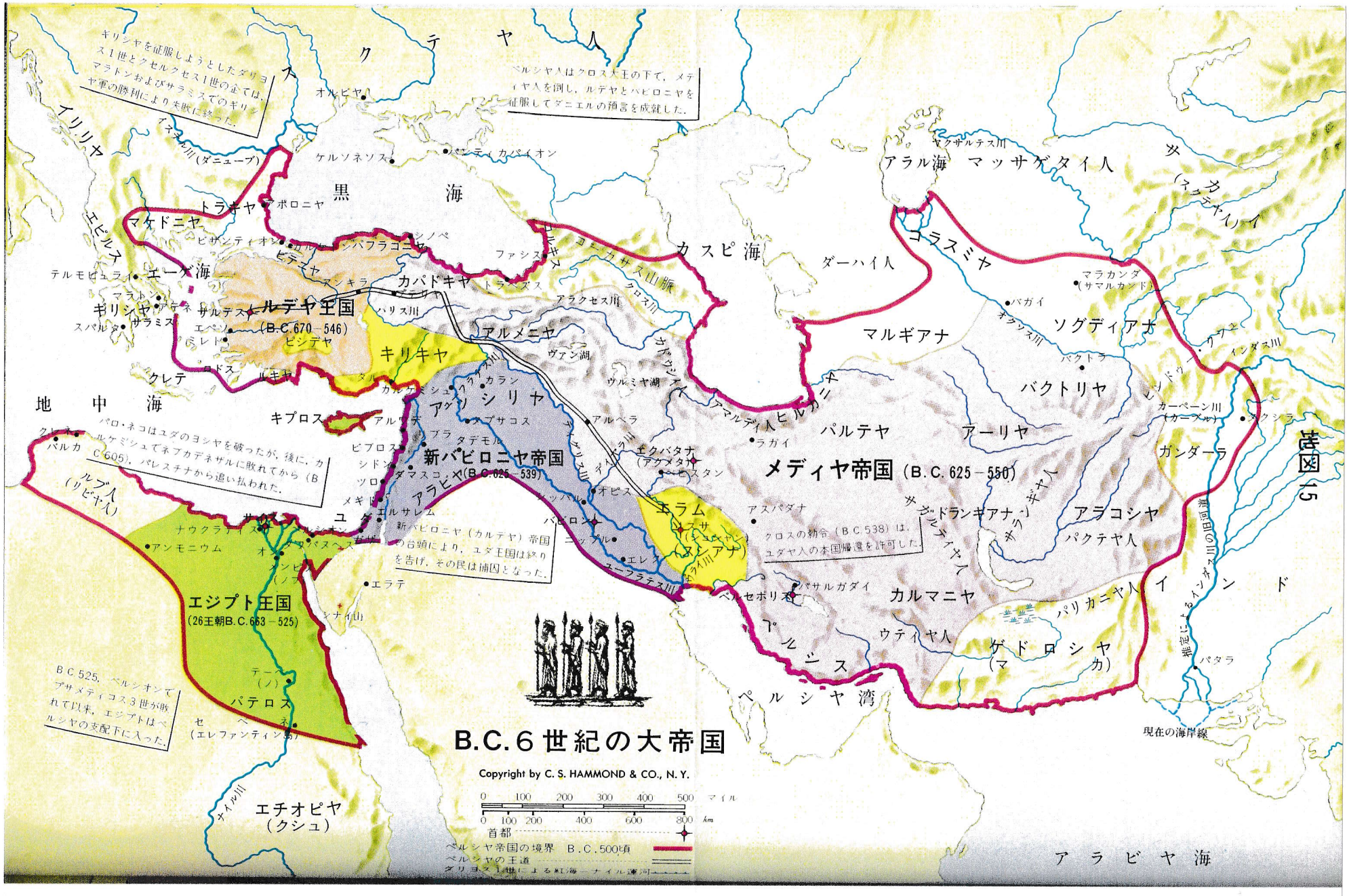
B.C.6世紀の大帝国
Copyright by C. S. HAMMOND & CO., N. Y.
0 100 200 300 400 500 マイル
0 100 200 400 600 800 km
首都
ペルシヤ帝国の境界 B.C.500頃
ペルシヤの王道
ダリヨス1世による紅海—ナイル運河
ペルシヤ人はクロス大王の下で，メディヤ人を倒し，ルデヤとバビロニヤを征服してダニエルの預言を成就した．
キリシヤを征服しようとしたダリヨス1世とクセルクセス1世の企ては，マラトンおよびサラミスでのギリシヤ軍の勝利により失敗に終った．
パロ・ネコはユダのヨシヤを破ったが，後に，カルケミシュでネブカデネザルに敗れてから（B.C.605），パレスチナから追い払われた．
新バビロニヤ（カルデヤ）帝国の台頭により，ユダ王国は終りを告げ，その民は捕囚となった．
クロスの勅令（B.C.538）は，ユダヤ人の本国帰還を許可した．
B.C.525，ペルシオンでプサメティコス3世が敗れて以来，エジプトはペルシヤの支配下に入った．
ルデヤ王国 (B.C.670－546)
新バビロニヤ帝国 (B.C.625－539)
メディヤ帝国 (B.C.625－550)
エジプト王国 (26王朝B.C.663－525)
クテヤ人
黒海
カスピ海
アラル海
マッサゲタイ人
ダーハイ人
コラスミヤ
ソグディアナ
マルギアナ
バクトリヤ
パルテヤ
アーリヤ
ガンダーラ
アラコシヤ
パクテヤ人
カルマニヤ
ゲドロシヤ
ウティヤ人
パリカニヤ人
インド
ペルシヤ湾
アラビヤ海
地中海
エーゲ海
キプロス
クレテ
ギリシヤ
トラキヤ
マケドニヤ
カパドキヤ
アルメニヤ
キリキヤ
アッシリヤ
アラビヤ
エラム
ユダヤ
エチオピヤ（クシュ）
現在の海岸線

図15